



本論文は現代フランス語の同格構文を実例に基づき体系的に詳細に分類・分析した研究(フランス語での執筆:本編426頁+資料編218頁)である。

本編の構成は「序論」、「第一部 先行研究のまとめ」、「第二部 状態動詞構文“X ETRE Y”, “X AVOIR YZ”」、「第三部 書き言葉の同格分析」、「第四部 話し言葉の同格分析」、「結論」の構成となっている。資料編は、書き言葉の用例:同定タイプと属性付与タイプ、話し言葉の用例、話し言葉において同格と競合する表現、に大きく分けられ、各々を更に詳細に分類・整理し実例が提示されている。

以下、主要点を取り上げていく。

先行研究の調査では、同格は様々な形の構文の中に認められているが、先ず、本論文では、同格を「繫辞の介入なしに述定関係を結ぶ二項間の関係」と定義し、分析対象を限定する。次に、やはり先行研究においては、コピュラ文と同格が同じメカニズムを持つとしばしば考えられており、同格の特性が示されていないことが明らかになった。そこで、être と avoir の述定文の分析がなされる。この分析では être 文には同定文(Le meilleur ami d'Hamlet est Horatio)と記述文(Le meilleur ami d'Hamlet est méchant)の二種類があり、その差は X ETRE Y での X と Y との指示力の差によることが明らかになる。また、X AVOIR YZ (Sylvie a les yeux bleus) では、AVOIR が Y と Z とを結びつけ、かつ、YZ を 発話のテーマである X に結び付ける役割を担っていることが分かる。これらとの違いをはっきりさせることにより同格構文の特徴がはっきりしていくことになる。

同定タイプの同格(X, Y)においては、指示的な名詞句 Y(同格項)が指示的な名詞句 X(支持項)を同定することにより述定がなされる。同格項(Y)は冠詞により限定された名詞句またはその相当句である。同定文(X ETRE Y)では非指示的な変数(X)が指示的な値(Y)により同定される。同定タイプの同格では Y が唯一性を示す場合(Christian Blanc, le président du groupe aérien, a dû apporter ...) と X が集合 Y の一員を示す場合とがある(A Lingen, une ville de 300 000 habitants, la police a fermé ...)。何れの場合も、同格項 Y の限定辞は Y を指示的な名詞句として機能させるために存在している。これに対して同定文での Y の限定辞は文法性の観点からその存在が強く要求されている。両者の違いは、同格では冠詞の有無が自由(冠詞の有無によりタイプは変わるが)であることから分かる。この指摘は同格は関係代名詞の形容詞節から出てきたものではないということの論拠となっている。

属性付与タイプの同格 においては同格項(Y)は無冠詞名詞、形容詞、分詞のいずれかである。コピュラ文の記述文と属性付与タイプの同格とを比較すると、Y が両方とも非指示的である点は共通している。しかし、コピュラ文の X と Y の位置は ETRE の前後でかなり固定しているが、同格構文においては、同格項(Y)の位置がかなり自由であるという違いがある。

上に指摘されたコピュラ文と同格構文との違いは、後者が前者から出てきたものではないことを示す重要な指摘である。

同格構文の構造の本質は上に示されたとおりであるが、伝統的には絶対分詞構文とされる次のような事例も同格として分析されている。Le moment arrivé, elle court vers l'amoureux (XY 型)、Le diacre, les bras écartés, modérait la musique (X, YZ

型：YZはXの同格項、ZはYの同格項；YZはXの「部分」であり、YZのXに対する位置は自由であることが指摘されている。）また、複数の同格を含む場合（Assis en face du premier ministre, le président de l'Assemblée nationale, Philippe Séguin, a rendu compte...、同格の中に別の同格が組み込まれた例（Fille d'un ministre exemplaire, écarté du pouvoir...、Marie Ledoyen est devenue l'épouse décorative d'un jeune loup...）も珍しくなく多くの例が挙げられている。

以上、書き言葉における同格の分析では、コンピュータ文との違いを明らかにしたこと、通常は取り扱われない多くの興味深い多様な用例を収集、分析、分類して同格の豊かな可能性を明らかにしていることが、この論文の功績であるといえる。しかし、同格の独自の限定の仕方により絶対分詞構文とされるものも対象となっているが、この点は問題がないわけではない。

次に、話し言葉における同格については、ポーズ、イントネーション、急激な休止、等による認定そのものの難しさが指摘されている。同格として認められた用例の数も少なく、タイプも殆ど同じ形式の言い替えのようなもの（... donner lieu à un rapport de stage un rapport de fin d'étage, ...）である。それで、同格と競合する表現（特殊なマーカーによって結ばれたもの：... qui traverse le fleuve, c'est-à-dire le mékong；関係詞でつながれた二項：... dans un livre qui s'appelle les lieux）も分析されている。収集しえた用例は少数ではあるが、本論文は話し言葉での同格を分析した最初のもののひとつであろう。また、書き言葉での同格との次のような違いの指摘は重要である。フランス語の話し言葉では文の主語が代名詞の場合が多いこと、同格項の文頭への配置が難しいこと、同格の凝縮された構造が話し言葉の傾向と対立していること、超分節的特徴が同格を認定するには十分はっきりしていないことが多いこと、などにより同格は話し言葉ではあまり使われず、使われてもタイプが限られていること。

本論文の構成は以上の通りであるが、以下に評価すべき点と問題点をまとめる。

（評価すべき点）

- （1）先行研究をかなり綿密に調査している。
- （2）通常同格と認められている構文の様々な面をかなり網羅的に体系的に明らかにしている。
- （3）コンピュータ文を含む関係代名詞形容詞節との違いを解明し、同格構文の特殊性を明らかにしている。
- （4）通常挙げられることのない多くの興味深い事例を収集、分析、分類、提示し、同格の可能性について大いに考えさせるところがある。特に「資料編」は手際よく分類されていて貴重である。
- （5）話し言葉での同格の分析を試み、書き言葉の同格との本質的違いを解明し、同時に同格構文の限界を示している。
- （6）以上をふまえて、同格は本質的に書き言葉において広範囲に使われるものであり、意味関係、文脈的要素に依存し、主文の述定内で機能する二次的で自立性を欠いた述定である、という結論は重要である。

（問題点）

- （1）分析対象を限定するために同格に一つの定義を与えたのはよいが、同時になされるべき同格の理論的位置づけが不十分であり、理論的枠組みもはっきりしない。
- （2）頻度数比較の際の数値処理に基本的問題がある。

- (3) 資料の種類分け（小説、新聞、等）が不十分である。
- (4) 発話構造、談話構造の観点からの考察が不十分である。
- (5) 全体の構成で、書き言葉分析に比重を置きすぎていないか。
- (6) 書き言葉分析で、句読点、特に, virgule（コンマ「、」）を重要視しすぎではないか。（Cf. 14世紀以前では「、」は記されていないとの指摘。）
- (7) 同格の種類の種類に問題があるのではないか（例、文の枠を越える同格）。
- (8) 同格を述定関係とすることに問題はないか。
- (9) コピュラ文と同格との違いの説明に用いられる「指示力、指示性」という概念にははっきりしないところがあるのではないか。
- (10) 絶対分詞構文も同格であるとするのは無理ではないか。
- (11) 話し言葉で同格が少なかったのは文体にも関係しているのではないか。

以上、本論文は同格について多くの点を明らかにしている力作であるが、基本的な問題点も少なくない。しかし、フランスにおける研究も含めて、最近の最も重要な成果の一つであるといえる。また、先行研究の綿密な調査力、資料の十分な分析能力、表現上の問題は少なからず残るが達意のフランス語力、等、博士論文の平均を質・量ともに十分に越えているという点では審査委員全員の一致が見られ、博士（学術）の学位に値するものと判断された。